

留萌の新時代がスタート。

街並や道路が近代化され、家庭では電気やガス・水道がごくあたりまえのように使われている今日、一方では、捨てられる汚水の量もどんどん増え、今のままでは、川やその他の自然や生活環境もだんだん汚染されてしまうという危機感を持ち、留萌市では昭和五十年から下水道事業を進めてまいりましたが、この下水道事業も、この四月から一期事業認可分一七五ヘクタールのうち約八三ヘクタールがようやく使用できるようになります。下水道はこれらの悩みを一举に解決する施設です。家庭や事業所から捨てられる汚水を処理場までパイプでむすび、きれいな水にしてから、川に放流されます。留萌にも快適な生活とっておいのある新時代がスタートします。

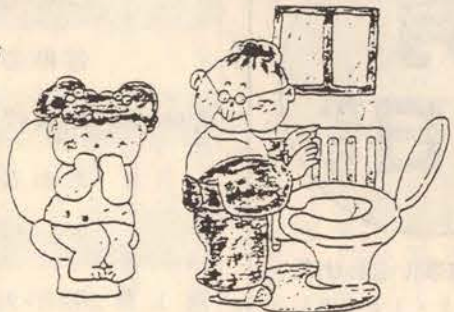
こんなに快適！下水道のある生活

**水洗トイレが
使えるようになります**

- 冬でも暖かく老人・子どもにも安全
- 悪臭がないのでトイレをヒーターで暖めることもでき、又便槽に落ちる心配がないので幼児にも安全です。



- お手入れらくらく
- いつも清潔
- トイレの掃除が簡単になりいつも清潔です。

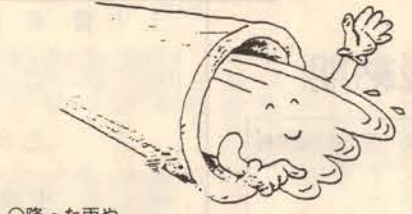


**ハエや蚊のいない
街になります**

**ぬかるみや浸水が
なくなります**



- 台所や風呂場から流れた水がドブや水たまりになって、悪臭を放ちハエや蚊の絶好の住み家となっていました。これらが原因となっていた病気も未然に防ぐことができます。



- 降った雨や雪どけ水は、雨水管ですみやかに川に放流されるので昔のような洪水などの災害がほとんどなくなります。

**川や海を
きれいにします**

- 汚れた水を処理し元のきれいな水に戻すので魚の住めるきれいな川や海になります。



ルルモツペの逸話 1



寛政年間のルルモツペ

留萌のアイヌの人たちについてはあまり、逸話が残っていない。ただ、和人の書いた書物の中にいくつかの物語が見られる。当時のルルモツペのアイヌの人たちの生活を垣間見ることのできる資料である。いくつか紹介してみたい。

寛政四年（一七九二）に幕府の宗谷での御救交易の一行に加わっていた串原正峯が旅行中見聞したことを書き綴った「夷語」の中に

留萌のアイヌの人たちは、以前長三郎がルルモツペ支配人をしていた頃、イコクタというアイヌの人がハウチコルにあった。段々瘦せ衰え弱ってしまい、アイヌの人たちがいろいろ治療してみても効き目がなかった。このことを伝え聞いた長三郎は、イコクタの家に見舞いに行った。長三郎は持ってきた一分金を取らして

「これは本州では宝なので、これを煎じて飲めばあらゆる毒を消す効果がある。それはかりか病気やハウチコルにも効き目がある。精だして煎じて飲みなさい。その通りにすれば必ず良くなる。」と言った。そして、一分金を貸してくれただので、毎日そのように煎じて飲んだところ、次第に元気がつき間もなく元気になった。

アイヌの人たちの生活を垣間見る

福士広志
海のふるさと館学芸係長

このハウチコルは、死人の肉を削って、呪いたい人にならないように食べさせることである。これを食べた人は間もなく死ぬが、又は、毒に当たって肺病の様に苦しむという。

人々はイコクタの病気もハウチコルの呪いではないかと疑い、心当たりある人を呼んで問いただしたところ、呪いをかけたことを白状した。このように人命にかかわることであったも、アイヌの人たちはみんな話合っただけで、決して和解しなかった。

和人の習慣にはない、不思議な習慣で自分等には理解できないものである。

ハウチコルとはパウチは人にいろいろな悪さをする者、コルは支配するで悪魔を使うこと、呪うことであるという。また、長三郎とは安永年間の支配人村山長三郎である。